

アジアを 聴く



日本アセアンセンター
事務総長

赤尾信敏大使

日本が東南アジア諸国連合（ASEAN）との経済分野での交流促進を図る日本アセアンセンターの事務総長として2期6年勤めた赤尾大使が今月末日で退任する。1961年の外務省入省から約47年に及んだ外交官生活にひとまず幕を引く。

米国での勤務が長く、1999年からの駐タイ日本国大使としてのバンコク勤務が初めてのアジア赴任だった。しかし、アジアとの出

にセンターが役に立っているかを説明してくれました」。センターへの義務的拠出金の日本とアセアンの分担比率を9対1から7対1にする案を設立協定の改正案に盛り込んだことも評価された。

日本としては初の多国間による経済連携協定（EPA）で今月1日に発効した日本アセアン包括的経済連携協定（AJCEP）や2国間EPAについては「質の高い、中身の濃い内容のEPA締結に努めるべき」というのが持論。「アセアン側の対日期待は大きい。シンガポールを除き中国や韓国との2国間のFTA（自由貿易協定）にはあまり関心がない」。関税撤廃の例外など日本が各アセアン加盟国と結んでいる現状のEPAにも不満だ。「シンガポールとやったように定期的にレビューしながら改正してゆくの望ましい」。

47年の外交官人生に幕

会いは意外に古く、駆け出しの外交官時代に勤務していた経済協力局賠償課にまでさかのぼる。

「ビルマ（当時）に始まって、インドネシア、フィリピンの3つが大きな賠償供与国だった。タイも含め、それらの国々に1965年から66年にかけて出張した。東南アジアの人たちともその頃付き合った」。賠償第1号となったビルマの東方カヤー州のバルーチャン・ダム視察では工事現場まで、ゲリラ出没地帯を軍に守られながら通過した。

在ウィーン、在ジュネーブの国際機関日本政府代表部、駐タイの大使を経て2003年1月、日本アセアンセンターの事務総長に就任した。1981年の設立以来、アセアンから日本への輸出促進、日本からアセアンへの投資、観光促進に貢献してきた同センターの活動意義については、衆院外務委員会からも関心を持たれ、今年5月、同委員会メンバーを招きセンターで説明会を行う。「各国の駐日アセアン大使が、センターの活動を評価し、如何

十数万人の外国人介護労働者が働く台湾などと比較し受け入れ数が少ない日本の現状には「看護師、介護士などの門戸解放をもっとやって良いのではないか」とする。双方にとってより実りあるアセアンとの連携強化、EPA実現を訴える。

福田赳夫元首相が1977年、訪問先のマニラで発表した東南アジア外交3原則「福田ドクトリン」の柱の1つに「心と心の触れ合う信頼関係の構築」がある。「福田ドクトリンの一部を体現するために誕生したのが日本アセアンセンター。国連を始め、国際社会での日本の発言力を高めるには出来るだけ沢山の友好国を作っておくことが重要。その意味で最も頼りになるのは長年の友好協力関係にあるアセアン諸国。日本は正にアセアン諸国とこそ『心と心の触れ合い』を築ける」。外交官としてのスタート、そしてゴールで関わったアセアンを見つめる眼差しは優しい。退任後、アセアンについての本を書く構想も温めている。